

# 品性に欠けるところはないか

上 廣 榮 治

「品格」とか「品性」という、長い間、忘れられていた言葉をしばしば目にするようになりました。近年、品性においてすぐれた人が少なくなり、逆に品性に欠ける人を見掛けることが多くなったことを危惧し、危機感を持つ人が増えたためだと思われます。

では、「品格がない」とか、「品性に欠ける」とは、どのようなことをいうのでしょうか。数学者の藤原正彦さんは『国家の品格』という著書の中で、品格とは「卑怯を憎む心」だといっています。

作家の曾野綾子さんは、ある雑誌に「日本人が子どもにもおねるような民主教育なるものをし続けた結果、これほど早く国民が品性と知性を失うとも思わなかった」と嘆いていました。この場合の品性に欠ける人とは、「与えられること」だけを要求して、「与えること」は損だと心得ている人のことです。

また、同じく作家の伊集院静さんはある新聞で、品性とは、「目の前にあるものを取りにいかないこと」であり、これは自分にとって大切なことだという意味のことを語っていました。

いずれの方も、社会から品格や品性が失われつつあると感じ、それを問題視しているのでしょう。しかし、お三方がいう品格や品性の内容は、いささかわかりにくいところがあります。

辞書を引いてみると、品格とは「品位。気品」のことで、品位は「人に備わっている人格的価値」、気品は「どことなく感じられる上品さ。けだかい品位」です。そして「品」とは、「人や物に備わる好ましいようす」だということです。

「どことなく感じられる」というのも曖昧あいまいですし、「好ましいようす」とは何をもって「好ましい」とするのでしょうか。そんなものは個人によっても、集団や社会によっても異なるではないか、という反論も出てきそうです。

しかし、私はそうは思わないのです。人間が人間であるかぎり、万人に共通する品格や品性というものはあると思うのです。レオナルド・ダ・ヴィンチの「モナ・リザ」を気品があると思わない人はいないでしょうし、マザー・テレサの品性を好ましく思わない人も知りません。

よく、品とは日本的なもので、欧米にはそれにあたる言葉がないという人がいます。しかし、和英辞典を引いてみると、品や品格は「taste (テイスト)」などと出てきます。そして「taste」を英和辞典で引いてみると、「審美眼、鑑賞力、判断力、品、センス」という意味がありました。

また、上品は日本語にもなっているように「elegant (エレガント)」でしょう。優雅で魅力的なこと、内面にじから滲み出てくる品のよさです。

このように外国語を媒介にすると、品格や品性、品位や気品などの品のあるなしを分けているものが何であるかが見えてきます。品があるための条件は、人として美しいとはどういうことかを知る「審美眼」を持っており、人として醜い言動をしない「判断力」を備えていて、バランスつまり「センス」がよく、優雅で

あり魅力的でもあることです。つまり、知性的で調和が取れていて、美しく奥ゆかしく、洗練されていることです。

これに対して品格や品性が劣るといふのは、その反対で、無教養で調和を欠いて、醜く自分勝手に、粗野であることです。むき出しの「利己心」などは、その最たるものだといえるでしょう。

こう考えてくると、冒頭の三人の方が言わんとしていた品格や品性についての共通点も見えてきます。「卑怯」であるのも、「与えられること」を要求しながら、「与えること」は損と心得るのも、「目の前にあるものを取りに」いつてしまうのも、すべて浅ましい利己心のなせるわざです。利己心をむき出しにして恥じないこと、それが品性がないとおっしゃっているのです。

今年の正月、皇后美智子様和歌集がフランスで出版されるという報道がありました。フランス語を監修した作家のオリヴィエ・ジェルマントマさんは、「かねてからの日本文化への賛歌の念が一段と強くなった。卑俗に成り下がった世の中に対して、人間よ、もつと謙虚になれと教えられた」と述べたそうです。この場合の「卑俗」とは、卑しく下品であることです。それは「謙虚」でないからだというのです。つまり、謙虚であることが品位にとって大切なことだというわけです。

また、古代ローマの歴史家タキトゥスは、「あらゆる情熱のなかで最も醜いのは権力欲だ」と言ったといえます。しかしその後、多くの権力者たちが他人を支配し従わせるために、多くの人命を奪ってきました。これこそ最も利己的で、品性に欠けた醜い行爲です。

このように、洋の東西を問わず、また時代を問わず、人間としての品格、品性、品位など、品の基準は一つなのです。いかに自分勝手な利己心を抑えられるかにかかっているのです。

しかし現代社会には、利己心に囚われた人、すなわち品性に欠けた人々があまりに多く目につくようにな

りました。むやみに自分の意見にこだわって、これを言い張る人、地位を利用して不正をなす人、他人の迷惑を顧みることができない人、何をするのも自分の勝手だと思っている人、権利ばかりを主張して義務や責任を思わぬ人、そして金がすべてだと考えている人……。いずれも、品性に欠けた下品な人たちです。

挙措動作の美醜にも、その人の品格は表われます。電車の中で大足を組んでいる人、化粧をする人、傍若無人に大声で話す人、道端にべたんと腰を下ろしている人、そして醜い姿勢で歩く人……。いずれも他人は眼中にない自己中心的な心の表われです。

これが戦後六十年の「個性尊重」の教育を経た結果なのです。個性尊重の教育とは、人間としてすぐれた個性、品格のある個性を伸ばす教育であるはずです。それが「私」を「公」に優先させただけのことに終わってしまったのでしょうか。公のことを思わない、自分勝手主義だけを伸ばして、大量の品性に欠けた個性を生み出してしまったのです。

もしも私たちの社会が、己があつて他があることを知らない利己心ばかりの社会になれば、人と人との絆は切れて、社会は崩壊するしかないのです。

では、私たちの品性はどのようなのでしょうか。「朝の誓」に見てみましょう。

三つの恩を忘れないのも、人の悪をいわず己の善を語らないのも、氣つき即行するのも、腹を立てず不足の思いをしないのも、そのすべてが、謙虚で誠実で人を思いやる実践です。そして「我も人もの仕合わせ」という大目標こそ、自分さえよければよいという利己心とは対極にあるものです。人と人を愛和で結ぼうという心です。

とすれば、真の実践者はその品格、品性においてすぐれているということになるはずですが、はたして皆さんは、品位に欠けるところはないでしょうか。利己心に囚われているところはないでしょうか。